

巻頭インタビュー

Interview

宇津木妙子

(ソフトボール元日本代表監督)

誰からも叱られないのは
さびしいことです。
見て見ぬふりはしないほしい。

今でこそ実業団のソフトボール部の女性監督は珍しくないが、日本リーグ初の女性監督に就任し、シドニー五輪、アテネ五輪で日本代表監督を務めた宇津木妙子氏は、その先駆けとなつて時代を切り開いてきた人物である。厳しい指導で知られ、鬼監督との異名をもつ同氏に、選手を伸ばすための叱り方などを聞いた。

叱られるのは期待されているから

私が日立高崎（現ルネサスエレクトロニクス高崎）の監督をしていたとき、「あのチームの練習は厳しい」と周囲から言われていました。確かに厳しく叱りましたし、しょっちゅう怒鳴っていました。しかし、見学に来た人から、「なぜ高崎の選手はあんなに楽しそうにアップしたり、ダッシュ



宇津木氏の個人ノックは1分間に40本のペースで打つため、「速射砲」と呼ばれる。

できるんだろう。練習を嫌々やっていない」と言われたことがあります。

私がノックをするとき、こっちではピッチャーがピッチング練習をして、あっちではバッティングの練習をしていたりするのですが、必ずみんなに声をかけます。ノックを受けている選手には、「おい、なにやってるんだ、そんなボールのとり方はダメだろう」、ピッチャーを見て「腕のふりが鈍いぞ」、バッティングしている選手には「芯でとらえてないだろう」と。選手たちはそれを嫌がってはいませんでした。何か言われるのは監督が見てくれているからであり、選手にとっては、叱られるのは期待されているからだ、という思いが強かったようです。

もちろん、ときには「なんでこんなに言ったのにわからないんだ」と、感情的に叱ることもありました。しかし、その根本にあったのは、選手がかわいくてしかたがないという思いでした。

だから、練習の前には必ず全員に声をかけてその日のコンディショニングをチェックしましたし、いつも心配していました。昨日はこうだったけど大丈夫かな、移動中なら

今はどのへんにいるかなと、24時間いつも選手のことを考えていたのです。これは、大学のソフトボール部の総監督を務めている今でも変わりません。

それぞれの良い面を伸ばす

チームに期待の新人が入ってきたとします。でも、実際は期待したほどではない場合もあります。そんなとき、私は選手のいいところを探して、それを徹底的に伸ばします。一人一人の個性が集まったときに最高のチームになるからです。走攻守の三拍子が全部そろわなくてもいいのです。

シドニー五輪のメンバーはまさにそういうタイプでした。個性豊かなメンバーでしたが、15人それぞれがいいものをもっていました。それをどうやって引き出そうかと思つて、私は約2年間、常に選手たちと会話をして、自分をさらけだしてきたのです。合宿のときはお風呂にも一緒に入って、24時間選手と一緒に生活していたので、選手は嫌がっていましたが（笑）。

最後に頼れるのは自分

ソフトボールを通じて私が感じるのは、



厳しい指導で知られるが、「24時間、いつも選手の事を考えている」と語る宇津木氏。現在はソフトボールの普及のためにも尽力している。

やっぱり、最後は自分なんだということですね。助け合うことやチームワークは大切ですが、エラーも、いいピッチングも、ホームランも、最後は自分に返ってきます。

文部科学省と日本体育協会の「子どもの体力向上事業」の一環で、全国の小中学校にソフトボールを教えに行く機会があるのですが、その授業の中でも耐える力、頑張

る力が大切で、結局、最後は自分なんだよ、という話をします。親や友達がいても、何かあったときに頼れるのは自分しかないから、心の準備をしておかなくてはいい、と話すと先生方は嫌がります。保護者が来ているので、そういうことを言わないでくださいと。しかし、人生はいつ何が起るかわかりません。今は幸せな暮らしを

していても、一瞬にして親を失う可能性があるわけですね。だからこそ、最後は自分なんとかするしかない、と教える必要があると私は思っています。

さらけだすことが大事

あるとき、子どもたちに、「叱ってくれる大人がいる？」と聞いたことがあります。そのとき、みんな「はい」と答えました。さらに「もしもみんなが悪いことをして叱ってくれなかったらどう思う？」と聞いてみました。もちろん「ラッキー」と言った子もいますが、「さびしい」、「それをしてもいいんだと思っちゃう」などの答えが返ってきました。ある子どもは「大人に見捨てられたと思う」と言っていました。

今の大人は、子どもを不快にすることを言わなくなっていると思います。でも、子どもたちなりに、いろんなことがわかっているのです。大人は隠さないで、もっと事実をさらけだしたほうがいいのではないのでしょうか。恰好をつけてしまうと、肝心なことが伝わらないからです。

私は、叱られてばかりいる子どもでした。思ったことを言うほうだったので、「小な

まいきだ」とよく言われたものです。昔は、親は絶対、先生も絶対で、口答えは許されない時代でしたから、指導者に疑問をぶつけると、「俺の言うことを聞いていれればいいんだ」と言われました。

しかし、子どもを叱るときには、「今なぜ叱るのわかる？」と聞いたほうがいい



●宇津木妙子（うつぎ・たえこ）

1953年、埼玉県生まれ。1972年にユニチカ垂井（実業団）に入社し、ソフトボール部で活躍。引退後、日立高崎（現ルネサスエレクトロニクス高崎）に、日本リーグ初の女性監督として就任。1997年に日本代表監督に就任し、シドニー五輪では銀メダル、アテネ五輪では銅メダルを獲得。2005年には、日本人女性として初の国際ソフトボール連盟殿堂入り。現在は、東京国際大学女子ソフトボール部の総監督を務める。

と思います。そして、「わからない」と答えたら、きちんと話をしてあげてほしいものです。なぜこんな話をするかというと、10歳のダウン症の女の子と生活しているからです。知人のお子さんを預かっているのですが、彼女は純粋な気持ちで「なぜ？なぜ？」といつも聞いてくるのです。これからは納得のうえで叱ることが必要なのではないでしょうか。

私は選手時代、叱られるたびに「いつか見ていろ！」と思っていました。悔しいからこそ努力して、つらさをバネにして頑張れる人間もいるわけです。その一方で、叱られると萎縮してしまう人間もいます。指導者は、その子に合わせた指導のしかたを考えることと、あとは根気が大事です。あきらめてはいけないと思います。

子どもに注意しない大人たち

ある中学校の父母の会の主催の講演会に行ったとき、ちよつと悪そうな生徒が体育館の外に5、6人いました。私が「何をやっているの。これから監督の講演があるからおいで」と声をかけると、嫌な顔をしています。校長先生はその場にいましたが、

見て見ぬふりをしていました。

体育館に入り、私が紹介されて壇上に立つても生徒たちはザワザワしています。先生方もいるし、PTAもいるのに、誰も何も言わないのです。私は5分間ぐらい黙っていて、それから「あなたたちはかわいそうだね」と言ったのです。「誰もみんなを注意してくれないってことはさびしいことだね」と言うと、その後はみんなが静かに私の話を聞いてくれました。

講演が終わって帰るとき、さっきのグループのリーダー格の男子生徒が、「監督、ありがとうございました」と言いに来ました。そのとき校長先生が、「3年間いて、初めてこの子が声を出すのを聞きました」と言ったのです。

もちろん、こういう校長先生ばかりではないと知っていますが、見て見ぬふりはしてほしくありません。先生方には体当たりして、自分をさらけだせる大人でいてほしいと願っています。特に、校長先生次第で学校は変わります。国で決められた通りではなく、それプラスアルファで自分の学校はこうなんだという信念をもって教育に取り組んでいただけたらと思います。